

一匹狼 いっぴきおおかみ

幸徳環境設計

一匹狼 いっぴきおおかみ とは、よく言ったもんだ。そんなに格好 かっこう いいもんじやないのにな。

もう一年 いちねん くらい前 まえ になるかな。それまでは、俺 おれ にも仲間 なかま がいた。

けれど俺 おれ は、望 のぞ んで群 む れをなしていたわけではない。群 む れている連中 れんちゆう が、俺 おれ に付 つ いてきただけだ。

奴 やつ らは、俺 おれ を勝 か っ手にボスに仕立 した て上げ、俺 おれ を楯 たて に、ほかの連中 れんちゆう 、群 む れと渡 わた り合 あ ってきた。俺 おれ がいなけりや、何 なに もできない連中 れんちゆう だ。

けれど、俺 おれ 自身 おれじしん も何 なん なんだ。

俺 おれ は、生 う まれて直 す ぐに一匹 いっぴき になった。なつたというよりか、最初 さいしよ から一匹 いっぴき だったといつた方 ほう が適切 てきせつ かもしれない。

それはなぜ、俺には親、兄弟がいないのか、
分らないからである。物心ついた時には、
すでに一匹だった。それ以前の記憶はない。教
えてくれる者もない。

そんな俺が、なぜか分からないが今まで生
き残ることができた。この野生の世界で、弱小
動物一匹が生き残ることがどんなに大変で、
奇跡に近いことか。

そう、俺は弱小動物だった。生きていくの
に必死だった。その日、その日を生きていく
ことだけを考えていた。それ以外の余裕はな
かった。ただただ、目の前の獲物、その場凌ぎ
の獲物を確保することだけで必死だった。

飢えていた。本当に飢えていた。

この世界において弱小動物の俺が、満足に
獲物にありつくことは稀で、ほとんどが子鼠
一匹すら、口にすることはできなかつた。
空腹と失望の連続で体は痩せ細り、皮に張
り付いたあばら骨と、黒く縁取られ窪んだ目
が、俺の姿をよりいっそう不気味な姿に変え

ているようだった。

死しにがみに神にとり憑つかれていたのかもしれない。きつと、そうだったのだろう。

満月まんげつの夜よるになると、どこからともなく狼おおかみたちの鳴なき声こえが、遠とおほ吠ほえが、あちらこちらから聞きこえてくる。

「ウオー、ウオー。オー、ウオー」

「ウオー、ウオー。オー、ウオー」

「オー、オー。オー、ウオー」

それはまるで、魂たましいの雄おたけ叫おたけびのように、静しずまりかえった夜よるの世界せかいに響びびき渡わたった。何なにを想おもい、何なにに對たいして叫さけんでいるのか。

俺おれも、ほかの奴やつらと同じように、叫さけびたくなる。鳴なきたくなる。泣なきたくなる。

なぜか満月まんげつの夜よるは、そんな気き分ぶんになる。

けれど俺おれは一匹いっぴきで生いきてきた。俺おれの存そんざい在ざいを知しる者ものはいない。万まんいち一いち、奴やつらと同じように叫さけび、鳴なき、そして奴やつらが俺おれの存そんざい在ざいを知しった時とき、奴やつらは一いっ体たいどうどういう行こう動どうに出でるだろうか。

俺おれをはたして仲なか間まとして迎むかえるであろうか。

それとも、敵と判断するだろうか。

恐らく、奴らは後者を選択するであろう。なぜならば、俺は奴らに認められるほど、まだ力を付けていない。

そう奴らにとって、俺は弱者としか見なされないであろう。そして、弱者Ⅱ厄介者、すなわち排除されるしかない。したがって殺される。

だから、俺はこの世界では、無きに等しい存在として生きていかなければならなかった。存在すら認められない。それが弱い者の宿命である。

俺は、強くなる。絶対に強くなる。そして、おまえらなどには怯えない。決して。

やがて月日が経ち、俺は雄と呼ぶにふさわしい体格と闘争心、経験を手に入れた。

その頃の俺は、本当に怖いもの知らずであった。何より若かった。それだけでは言い表されないくらいに突っ走っていた。何も躊躇うことなく、ただがむしやりに暴れていた。本能

のおもむくままに、何も考えずに。

そんな俺おれに転機てんきともいえる時ときがきたのは、
秋冷深まるしゅうれいふか満月まんげつの夜よるだった。

その日ひ、その満月まんげつの夜よるは、いつもの満月まんげつの夜よる
とは、どこか違ちがった。何なにが違ちがうというわけ
はないが、いつもより雲くもが厚あつく、雲くもの多おほい日ひ
あった。

その雲くもが、秋風あきかぜに吹ふかれながらゆっくりと
星空ほしぞらと満月まんげつを覆おおい隠かくすように左ひだりから右みぎへと
移動いどうしていた。あたかも月光げっこうが、地上ちじょうの万物ばんぶつを
照てらすことを嫌きらうかのよう

に。けれど、満月まんげつの光ひかりは、雲くもによつて遮さへきられて
いるはずであるが、なぜか、俺おれの目めには眩まぶしし
く感かんじられた。そして、時折雲ときおりくもの切きれ目めから現あらわ
れる月光げっこうが。なんとも妖あやしく幻げん想的そうてきな夜よるだっ
た。

俺おれは、いつもと同じおなじように、いつもの満月まんげつの
夜よると同じおなじように、叫さけびたくなつた。泣なきたく
なつた。

いつもの俺おれであつたならば、いつもと同じおな

ように、泣き叫ぶことを我慢していただろう。
じつと耐え。ただ本能が収まることを、ただ
ただ待って、抑えていただろう。

それが当然であって、今までそうであった
からである。我慢すること、俺は生き延び
てきた。ここまで、成長することができたの
である。

そして、ほかの狼たちの叫び、レクイエム
を耳にするたび、恐れ怯え、体を丸め、震え
ながら、その夜をやり過ごした。今までずつ
と、自分を消し去って生きてきた。

しかし、この日の俺は違った。何がどう違う
ということではないが、とにかく違った。本能
が、俺の中にある雄の本能がそうさせたかも
しれない。

俺は、満月に向かって叫んだ。

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

今までの鬱憤を晴らすかのように、叫んだ。

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

もう怯えることはない。好きなだけ叫んだ。

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

俺の存在、その存在を誇示するかのよう
に、叫んだ。

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

俺の中の雄が、叫ぶ。

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

「ウオー、ウオー、オー、ウオー」

「オー、オー、オー、ウオー」と。

これが、雄叫びというものなのだろう。

俺の中の、本能が目覚め、躍動する。血が熱

い。体中の血が激しく廻り、爪の先までも熱く

なる。熱い。俺の、俺の中の血が騒ぐ。

俺は初めて、生きている実感がした。

満月に照らされ、銀色に光る体毛は、尾の

先端までもが透き通るように美しい。目には、

その内から湧き上がる獣の気が集約されてい

るかのよう、眼光が鋭さを増す。そして、

大地をしつかりと踏みしめた四肢は、何者をも寄せ付けない野獣の威厳を感じさせる。

これが雄なのだ。雄と呼ばれる存在である。

やはり来た。奴らの中の下っ端と思われる

奴が。恐らく偵察に来たのだろう。

奴はひと目、俺を確認するなり、一目散に逃

げ去った。それは、直ぐに違う奴が来ること

を意味する。そう、奴の報告に見合う奴が来る。

ただだ。

奴か。俺に見合う奴は、あいつか。

俺より、ひと回り大きなガタイをしている。

「おい、おまえ。ここら辺では、見ない顔だ

な。どこの群れのもんだ」

「俺は、群れてなんかいない。一匹だ」

「ほー。おまえ一匹で、俺たちの縄張りに居る

わけだ。そりゃあ、めでてえな」

「悪いのか」

「うん、悪いな。馬鹿か、おまえは」

奴は、そう言うのと、いきなり俺に飛びかか

ってきた。

「ガウー、ガルル……」

一瞬のうち、奴に俺の右耳の三分の一をもつてかれた。

痛い。耳に火が点いたように熱い。

だが、それからのことは覚えていない。気づいた時には、奴は俺に腹を見せていた。降参の合図だ。何がどうなったかは分からない。右耳に熱さを感じた時から、まったく覚えていない。

そして、俺は勝った。

あれからまた、直ぐに満月の夜がやってきた。あつという間だ。

もう、失った三分の一の右耳は痛まない。

いい雄が台無しになっちゃった。

俺は、満月に向かって、おもいつきり叫んだ。この間と同じように、おもいつきり叫んだ。

しばらくすると予想通り、奴らは現れた。
一頭。二頭。三頭。四頭。……二十五頭。

その中には、この間やつつけた奴と、偵察に来

た奴の姿も見えてとれた。

これが本隊か。雄が十頭、雌が五頭、子供が十頭といったところだな。

そして中央にいる、赤茶色の毛並みをしたひとときわ大きな奴が、この群れのボスだな。俺を目いっぱい威嚇してやがる。

けれどなぜか、俺は怖くはなかった。この群れを前にして怖気づかなかった。

ボスと思われる奴が、一歩、一歩、俺に近づいてくる。ゆっくりと、俺を焦らすように、俺を威嚇するように、俺を屈伏させようと近づいてくる。

「おい、おまえ。この間は、俺らの仲間をかわいがってくれたそうだな。ありがとうよ」
「礼は、要らないよ」

「そうか、この群れを前にして、そんな大口を叩けるか。大した胆だよ」

そう言うと同時に、赤茶色の毛並みをした狼が、俺に襲いかかって来た。

けれど、この前の時の俺とは違っていた。

相手の出方が、よく見える。奴の息遣いまでもが、よく分かる。けれど、奴は強い。この間の奴とは比較にならないほどに強い。

体中が熱い。奴に咬まれた傷口が熱い。けれど、俺の中のものの方が、もつと熱い。鉄をも溶かすマグマのように。

気が付くと、この間と同じように、目の前の敵が、俺に腹を見せていた。

俺は興奮していた。

なぜ、ここまで興奮するのかは分からない。けれど、この前といい、今回といい、俺は今まではない興奮を味わっていた。

そして俺は、仲間を手に入れた。

奴らは、俺に付いて来た。

俺が獲物に飛びかかると、奴らも俺の後を追って飛びかかる。一匹でいた頃よりも、大きな獲物や群れを襲うことができるようになった。

奴らは、捕らえた獲物を俺が口にするまで、絶対に口にするとはなかった。自然と俺を

群れのボスと認め、俺をボスに仕立てあげたのである。俺の意思とは無関係に。

そして雌の狼たちも、俺に群がるようになってきた。一匹どころではない。群れのすべての雌が、俺に媚びる。どいつも、こいつも、俺に尾を振ってくる。

この世界では、力がすべてであると悟った。悟らされた。強いこと、力がすべてであって、絶対である。

やがて俺の群れは、大所帯になっていた。五十頭近くの群れになっていた。

その頃からか、俺は闘わなくなっていた。俺が闘わなくても、群れ自体が強く、大きくなっていたからである。

何もしなくても、俺の前には、一番に獲物が届けられる。何もしなくても、一番上等な雌が、俺のそばにいる。何もしなくても、俺らの群れが、一番の力をもっている。

そう、俺が何もしなくても。

俺は驕っていた。野性を忘れていた。何よ

り雄であることを見失っていた。

俺は、勘違いをしていた。大きな勘違いである。いつしか雌がいるから、俺は雄である。と、本気で思ってしまった。そう考えるようになつてしまっていた。

それは、雄でなくなつたことであると同時に、この力の世界からの失脚を意味するものであつた。

そんなある時、別の狼の群れに遭遇した。その群れは、あきらかに小さな群れで、十五頭前後しかいないように見える。しかし、すべてが雄の群れである。

先頭にいる奴が、ボスであろうことは、その風貌から容易に察しがつく。若い、とにかく若い。俺は、そう感じた。

「あんたが銀狼か。思っていた以上に、老いぼれだな」

若い狼のボスが、俺を蔑むように言った。その時俺は、なぜか頭にこなかつた。ただ俺は、そんな風に呼ばれていたのか。銀狼と呼ば

れていたのか。そんなことしか考えられなかった。思えなかったのである。

それどころか俺は、この若い狼に対して、親近感に近い感情すら抱いている。なぜか、敵として見る事ができなかったのである。

そして、その若い狼のボスに出逢ったのが、俺の王様暮らしの最後になったのは言うまでもない。

俺は、あの若い狼に対して、背を向けてしまったのである。闘うどころか、闘うことを放棄してしまったのである。なぜかは、分からない。負けるとも、勝つとも分からないのに。ただ、闘う気はまったくおきなかったのである。

俺は、そのまま若い狼のボスに背を向けたまま、自分の群れからもはぐれ、ただ歩き続けた。もう、付いてくる者は誰もいない。

それは群れの奴らが、俺をボスとは認めなくなつた瞬間であつた。そしてまた、一匹になつた瞬間であつた。

俺は、また一匹になった。

けれど、何となく落ち着いた。

何となく、淋しくもあつた。

ただ夜空に煌めく星だけが、ぼんやりと見えた。

群れから離れた俺は、また獲物に往生するようになつていた。今までは、黙つて寝ていても、黙つて獲物が置いてあつた。けれど、もう、そんなことは誰もしてはくれない。そんな俺は、やがて家畜を襲うようになつていた。もう野生の獲物を追うことが出来なくなつていた。出来なくなつたというより、億劫になつていたのかもしれない。

人間が飼っている家畜を襲うことは、容易である。逃げ場を失つた獲物を襲うことは簡単だ。ただ、人間にさえ見つからなければいいだけである。しかも、どいつもよく肥つていやがる。

俺は、そんな生活を繰り返していた。その生活にどっぷり浸かつていた。気軽だとさえ、

思い始めていた。

もう俺は満月の夜さえ、吠えることを忘れていた。ただただ煌々と輝く丸い月を、ぼんやり眺めていただけである。

そして、そんな俺に天が判決を下した。

野性を忘れた俺に、判決が下った。

雄でなくなつた俺に、判決が下された。

ある夜、俺はいつものように家畜を襲おうと、人間たちの敷地に入り、鶏小屋の扉を開け入った時である。『ガチャン』と無情の音が鶏小屋に鳴り響き、人間が用意した罾が、俺の左の前足にがっちりとはさまつた。

俺は直ぐに、人間たちが来る前に、何とかしなくてはならないと思い、自分の左の前足を噛み切つた。そして逃げた。一本の足を失いながら、三本の足で逃げた。

痛い。とにかく痛い。意識が朦朧としてくる。俺の血が、俺の血が、容赦なく滴り落ちる。大地が、俺の血を吸い上げる。寒い。蒸し暑い夏の夜であるのに、なぜか寒い。どんどん

ん、どんどん、体の熱が奪われていく。

寒い。寒い。寒い。……。

人間の声が、うつすらと聞こえてくる。

「こいつか、こいつが今まで俺様の家畜を食い荒らしてきた奴か。ざまあみろ。馬鹿が。人間様の物に手を出すから、こういう破目になるんだ。一匹狼さんが、いい様だ。まったくよ」

なぜか、俺は頭にこなかつた。人間ごときにこんなことを言われても、何とも思わなかつた。それどころか、自分自身が、とても滑稽にさえ思える。ざまあねえなって感じである。また、これで良かったとすら、今は思う。

『ドスン』

人間が放った銃声が、月明かりに照らされた夜空に響きわたる。

一匹狼とは、よく言ったもんだ。そんなに格好いいもんじやないのにな。

（一匹狼 完）